

かつて、私どもの周囲に、「逢魔が時」と呼ばれる時間があった。日が落ちてあたりが灰色に変わり、ものの形がその闇におぼろに溶け出していく頃の呼称である。

「そんな時刻まで遊んでいると、魔ものに魅入られ、よくないことが起こる」と、子どもの戒めにも用いられていたらしく、私は、ただひたすら「オーマガドキ」という音の響きの凶々しさを恐れていた。

何故、そんなことになったのか、憶えていない。ある夕方、私は、家の門柱にしがみついて、薄暗く閉ざされた玄関の戸を見つめていた。ものの一〇メートルほど先に、不機嫌におし黙ってそれはある。然し、かけていって、開き戸に手をかければ、恐らくは、簡単に開くに違いない。或いは、「ただ今」と一声呼びさえずれば……。

にもかかわらず、私は、身動き一つ出せず、まだ燈火のつかない入り口を、ひたすら、見つめ続けていた。きつと、「オーマガドキ」に抱きすくめられ、金縛りになっていたのだろう。ほんの一寸でも体を動かしたら、或いは、ため息ほどの声でも立てたなら、この黄昏色の均衡が破れて、あたりは一斉に、妖しいものたちの世界に変わるように思えた。

昼が去って、夜が訪れるまでの境界、夕方は、昼にも属さず、未だ夜でもない。所属の明らかでないものに「妖異」のしるしを与えるのは、己れの日常を正当と位置づけて、生活の基盤を確保し、心の安らぎを得ようとする人間のちえであったろう。そのゆえに、日暮れ方は「逢魔の時」として、聖性を孕んでいた。人工の明りに追放された「オーマガドキ」それは、子どもにとって何だったのだろうか。問い直したい思いである。

(本田和子)

## 幼児の教育 第七十八巻第七号

七月号 © 定価二五〇円

昭和五十四年六月二十五日 印刷  
昭和五十四年七月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

© 本誌御購読についての御注文は発売所  
所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。